

汗で拓く「都市経営」

私の任期は後二年です。仕組みをいくら変えても、そこで働く人の意識が変わらないことは動きだせません。職員の意識改革だけではなく、このまちに住む人々の意識を変えていく。これからはその二年間になると思います。権利を主張する住民から、権利を主張する代わりに義務をしっかりと果たして一緒に汗をかいてくれる市民へと変わっていただくための本質的な意識改革です。

今、「栃木市の将来を考える百人委員会」を立ち上げ、住民代表を公募して百四十人を選び、栃木の将来構想のための意見をいただいているところです。この構想を作る段階では市の職員は最低限のお手伝いしかしていません。一定の枠組みをあらかじめ役所が用意するのではなく、まったくゼロから考えていただいています。福祉、教育

すべてにわたって、市民が求め

る栃木市像を具体的数値として出していただき、もう一つ、要求をするだけではなく、栃木市の将来の骨格を作るために市民が果たさなければならぬ役割的な目標を出していただいています。それを元に、役所がどこまでできるのかをすり合わせて新しい総合計画を作り、自治基本条例、つまり市民の皆さんとのお約束をするための約束事を今後一年間をかけて作ります。

これからの時代、国ははつきり申し上げて、当てになりませんが、それに対する財政的な裏付けがほとんどないのが現状です。国民の皆さんからいただく税金の総量の三五パーセントが地方、六五パーセントが国に回っています。国が三五パーセントです。地方が六五パーセントの仕事をやっているんだら、それに見合う財源がないといけません。ところが権限委譲の美名の元に地方に

やってきたのは仕事だけです。

そこへもってきて、三位一体の改革で、地方交付税の圧縮と国庫補助金の削減です。だから、国や県を当てにしないで経営が成り立つような運営をしていくしかないんです。これまでの「行政運営」から「行政経営」へ、そして、「都市経営」という視点での自立的な体制作りです。

この市でも、財務体質の改善を行い、いちばん多いときで三百三億円あった借金を二百六十億円にまで減らしたものの、このままでは四年後には四十億ぐらゐの赤字になることが見えています。今、地方のどの自治体も同じように借金を抱えています。そもそも国が地方に作らせた借金です。地方の借金はこの十年間で倍増しています。国の制度改革によって借金が増えた。地域総合整備事業債です。自治体の施設を作るために国から借金をして土地建物を確保しながら、そのかわり、後年度において、地方交付税を算出する際に、地域総合整備事業債の最大で五

五パーセントを基礎数値として

参入しますよということですが、その仕組みに地方が乗ってしまつた。いつか国も財政が逼迫する時期が来ます。それを地方が見通すことができなかったわけです。また、財政的に脆弱な小さな市町村が合併する、その際に合併特例債を発行します。ところが合併特例債は、地域総合整備事業債と同じような仕組みですから、合併後も税制的に困窮することになります。

このままいけば合併はどんどん進むでしょう。すると、地域のアイデンティティはどうなるのでしょうか。

理念や理想だけで物事は進んでいきません。昔は理念や理想で成り立ったのは、人々の心の中に地域に対する愛着と一言いすか、「思い」があったからです。しかし今、「思い」がないところに、「地域の力」などと語りかけて何が生まれてくるのでしょうか。これからは、仕組みをきちんと作って、その中に思いのある人たちを育てていく。

そういう作業をしていかなければならないと思います。

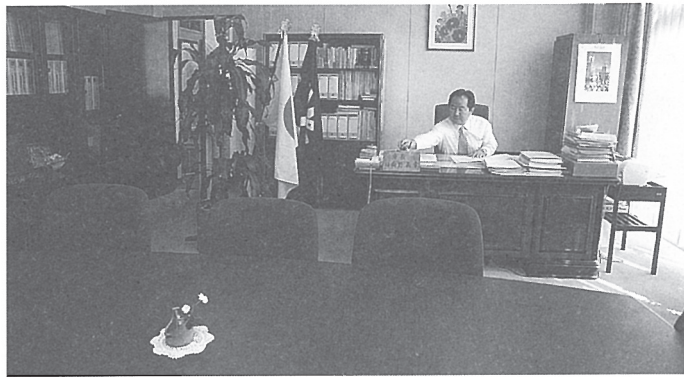
将来的には自治体の在り方も変わらざるを得ないときが来るでしょう。栃木市にはブロッコごとくに五つの公民館があります。この公民館に市役所の総合行政庁舎の機能を移管して、教育、福祉、生涯学習といった行政サービス機能をもたせるのです。すると、住民は住んでいる地域ですべて対応できるし、高齢者も障害者も、地域の中で自立できる。市役所はそれらの中枢機能としての役割を果たせることができるればいいわけです。

この最終的な目標は、地域主権です。もともと日本の村々にあった地域自治、地域力の復活であり、人が人を助け、隣近所を気遣って生活するという地域自治を機能的な仕組みとして成立させるということです。

生の実感

改革を推進する

「なぜ市長はここまでできるの



ですか」と尋ねると、「次の選挙を考えていないから」「市長というのは仮の姿だと思っただけです」と返ってきた。

自分の立場にいつまでも執着し、自らを変えることも前を向いて歩き出そうともしない人間ばかりがはびこっている現代の日本は今、改革ブームである。

誰かがやってくれないと困るといわんばかりに、改革を待ちわびる声が大きくなる。

美辞麗句を並べ、あるいは危機感を煽って警鐘を鳴らす人は多い。しかし、この風土に暮らす人々の実態を見据えて、一人ひとりがその人らしく暮らせる道を探っている人がどれほどいたらうか。その視点に立ったとき、立ちはだかつていたのは現在の制度や法律、仕組みだったというのなんともやりきれない。国の法律と現場との乖離、それを責任を持って埋めていくのが行政の責任と市長は語った。

最後に市長は母上の話をしてくれた。膠原病という安らぐことのない病に侵され、何度も生死の境をさまよいながら、わが子に対しては、なぜこんなに厳しくするのかと思うぐらい厳しかったという。そして、洗濯、掃除、料理から繕い物まで、何でもできるように鍛えた。

母上が亡くなったとき、医者が「君のお母さんは本当に欲張りだった」と語ったという。発

病当時は「わが子が小学校に上がるまで」、小学校に上がれば、「中学校に上がるまで」、そして「高校に上がるまで」命を長らえさせてほしいと頼み込み、発病してから二十五年を生き抜いた。

小学生の息子が中学生の番長から呼び出されてボコボコにやられたとき、泣いて帰った息子を「もう一度喧嘩してこい」と追い返した母、息子に殴られて血相を変えて怒鳴り込んできた親を「子どもの喧嘩に大人が出るのはおかしい」と言って、追いかけていたとき、「外へ出たときこそ、自分の内側に目を向け、故郷を見てごらん」と言った母……。一緒にいる時間は決して多くはなかったけれど、息子の心に確固たる芯を残したその母の、自らの死を意識しながら一日一日を生きているという生の実感。その実感が、もしかしたら真の改革の推進者だったのかもしれない。